

形態と統語構造との相関

ーテ形に関する分類方法の検討ー

内丸 裕佳子

キーワード：活用論，ムード，形態，意味，統語構造

1. はじめに

本稿では「ーテ」という形態をとる動詞，あるいはいわゆる形容詞・形容動詞（以下テ形と呼ぶ）が，先行研究，とりわけ二種類の活用論において，どのように分類されているかを概観し，その分類方法からどのような問題が生じるのかを言及する。そして，テ形に関する分類方法を検討することにより，テ形の諸特性を捉えるためには，テ形という形態と統語構造との相関を明らかにすることが不可欠であると主張する。

本稿で取り上げる活用論は，学校文法¹における活用論と，形態と意味との対応を重視した活用論の二つである。活用については多くの先行研究がある²が，そのうちの一部を取り上げてこのように二分するのは，テ形に関する現在の主な先行研究（加藤（1995a, 1995b），吉永（1995, 1997）など）が，特に寺村（1984）の形態と意味との対応を重視した活用論と陳述度の強弱（degree of Modality）という点で関わりを持ち，この活用論が学校文法の活用論と対峙しているからである。そこで，2節では学校文法での活用論を，3節では形態と意味との対応を重視した活用論を取り上げ，テ形が活用形としてどのように扱われているかを記述し，それぞれの分類における問題点を述べる。4節は活用論ではないが，南（1974），加藤（1995a, 1995b），吉永（1995）を取り上げる。これらの研究の特徴は，テ形が表す意味に応じて，テ形がどのような要素から構成されているか丁寧に記述している点にある。4節でこれらの研究を取り上げるのは，3節で挙げた問題点を解決する一つの研究方向として参考になるためだと考えるからである。5節では，4節で取り上げた研究の問題点から，形態と意味との対応を捉えるには，どのような統語構造からテ形という形態が派生するのか，テ形という形態と統語構造との相関を明らかにすることが不可欠であると主張する。

¹ 本稿では橋本進吉の『新文典』『新文典別記 口語篇』を典拠とし，現在，小学校・中学校・高等学校で行われる現代日本語の文法教育の内容を学校文法と呼ぶことにする。学校文法は橋本の文法論がもとなっているが、『改制新文典別記 口語篇』の序言で「必ずしも全部私の主張する説でなく，通説に妥協した所も少くありません。この事は特に御諒解を得たいとおもひます。」（1938：2）と述べているように，全てが反映されているわけではない。

² 本稿では橋本以前の文法論や，チェンバレンなどの外国人による日本語研究（詳細は Kaiser（1995）を参照）について言及していない。その点で本稿で取り上げる先行研究（活用論）は非常に限られたものである。

2. 学校文法におけるテ形の扱い

学校文法では、いわゆる形容動詞の「～で」を除き、テ形は活用形とみなされていない。

【表1】は動詞の、【表2】はいわゆる形容詞・形容動詞の活用表である。

【表1】動詞の活用表

	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
a.書く（五段活用）	か	か こ	き い	く	く	け	け
b.経る（下一段活用）	（へ）	へ	へ	へる	へる	へれ	へろ へよ

（『新しい国語3』 p.258）

【表2】形容詞・形容動詞の活用表

	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
a.寒い	さむ	かる	かっ く う	い	い	けれ	
b.便利だ	べんり	だろ	だっ で に	だ	な	なら	

（『新しい国語3』 p.258）

学校文法における活用とは、助詞や助動詞への続き方に伴う語形変化を五十音図にしたがって整理したものである。例えば、現行の教科書に見られる五段活用、上一段活用、下一段活用、カ行変格活用、サ行変格活用という命名は、五十音図に基づくものである。また、未然形、連用形、終止形、連体形、仮定形、命令形という6つの語形変化の捉え方は、文語を基準にしている。活用形が6つ存在するのは、文語のナ行変格活用動詞「死ぬ」「往ぬ」が他の活用に比べ、「死な、死に、死ぬ、死ぬる、死ぬれ、死ぬ」の下線部のように最も多く語形変化を持つからである。それに合わせて現在でも活用形を6つに設定しているのである（cf. 橋本（1938：55-56, 1948：22-42））。

さて、本稿で考察するテ形であるが、学校文法ではテが接続助詞であるため、テ形という形態は活用形とみなされない。テ形は「連用形+接続助詞テ」と分類される。そして、接続助詞のテについて見ると、(1a-c)のテと(1d)のテは同一のものとみなされる。

- (1) a. 雲が広がって、雨が降り出す（継起）
- b. 転んで足をくじく（原因）
- c. 大きくて重い（並列）
- d. 雪が降ってくる（補助の関係）

（『新しい国語3』 p.262）

さて、学校文法の問題点は奥津（1981）、寺村（1984）、鈴木（1989）など、すでに多くの先行研究で指摘されているが、本稿では次の二点を挙げる。

- (2) a. 語幹、活用語尾、派生接辞の区別が明確でないこと
- b. 意味との対応を考慮した場合、活用形の認定に問題があること

まず、(2a) について見ていく。【表 1】の活用表を見ると、(a) の「書く」の語幹は「か」だが、(b) の「経る」の語幹は存在しない。学校文法では、例えば「-ない」に続く形を未然形とし、(a) の五段活用の語形変化に合わせるため、(b) の一段活用で語幹が活用語尾になるという矛盾が起こる。また、(a) の語幹を正確に捉えるなら kak- である。学校文法には活用形態の認定に問題があることがわかる。

次に、意味との対応を考慮した場合の活用形の認定について、(3) の「書け」という形態を例に考える。

- (3) 書け
 - a. 論文を書け（命令形）
 - b. 論文を書けば、考察が深まるはずだ（仮定形）

(3a) の「書け」は、そのままの形で命令を表し、命令形という活用形として認定される。

(3b) の「書け」は、そのままの形で仮定の意味は表せない。この後に「ば」という形態が続くことによって仮定の意味となる。形態と意味との対応を考慮した上で活用形を認定するならば、仮定形は「ば」を含めた「書けば」の形態で一つの活用形と認定しなければならない。(3) の例から、意味との対応を考慮した活用形の認定にも問題があることがわかる。(3) 以外に、(1) の接続助詞テの扱いを見ると、テは (1a-d) のように継起、原因、並列、補助の関係と下位分類されている。テという形態は同一であるが、形態と意味との対応を考えるならば、それを接続助詞として一つにまとめるべきなのか考察の余地がある。

学校文法では文語文法と五十音図にしたがって現代語を捉えようとするため、語幹と活用語尾という形態の認定や、形態と意味との対応を考慮した活用形の認定に無理が生じてくる。3 節で述べる活用論は学校文法の捉え方と対峙するものであり、特に形態と意味との対応を重視している。3 節に挙げる活用論では①活用形をどのような意味と対応させて体系化するか、②語形変化のどこまでを活用形と認定するか、の二点が議論の中心となる。

3. 形態と意味との対応

3.1 形態と意味との対応を重視した活用論におけるテ形の分類

本節では次の二点、①形態と意味との対応を考慮した活用体系とはどのようなものか、②①において語形変化のどこまでを活用形として認めるのか、という点を中心に見ていく。

まず、形態と意味との対応を考慮した活用体系についてテ形を例に見ていく。芳賀(1962)、佐久間(1966)、渡辺(1971)、寺村(1984)、鈴木(1989)、高橋(2003)は、現代語の語形変化を文語や五十音図にしたがって捉えるのではなく、何らかの意味に対応する形の体系として捉える立場をとる。例えば、学校文法では「書け」という形態は命令形であり、仮定形でもあったが、活用形を意味との対応で捉えると、仮定形は「ば」を含めた「書けば」の形態で認定される。したがって、「書いて」というテ形も「連用形+接続助詞テ」ではなく、意味との対応を考慮し、「書いて」で一つの活用形として認定される。研究者それぞれの分類方法や命名は異なるが、テ形は(4)や【表3】-【表6】のように活用形の一つとして認定される。

- (4) 基本形 → 連用
- | | | |
|------|----|--------------------|
| 「歌う」 | 修飾 | 歌って聞かせましょう |
| | | 歌えば大空晴れて来る (連用修飾形) |
| | | 並列 |
- (芳賀 1962 : 161)

【表3】佐久間(1966)によるテ形の分類 (佐久間 1966 : 85)

語尾 / 語幹	強変化 (ウ活)	弱変化 (ル活)	混合変化 (変格)	
	yom·	oki· ne·	k·	s·
中止形	ite/ide tte nde	te	yte	yte

【表4】渡辺(1971)によるテ形の分類 (渡辺 1971 : 354, 376-377)

従来の活用形	連用形1	連用形2	連用形3
活用形	連用形	誘導形	並列形
動詞	肖*	肖て	肖, 肖て
	読み*	×	読み, 読んで
形容詞	珍らしく	珍らしく	珍らしく 珍らしくて
いわゆる形容動詞	確かに 確かで*	確かに	確かで
指定助動詞	(事)で*	(事)に	(事)で

(*は形式的連用形)

平凡な話をとても珍らしく話す (連用形)

今朝は珍らしく鳥が鳴いている (誘導形)

内容は珍らしく、口調は深刻であった (並列形)

【表5】寺村 (1984) によるテ形の種類

(寺村 1984 : 44-45)

ムード	基本語尾	夕形語尾
保留	I・I II φ III {si ki}	<連用形> I-te~de II-te III {site kite}
		<タリ形> I-tari~dari II-tari III {sitari kitari}

Iは語幹が子音で終わるもの、IIは語幹が母音で終わるもの、
 IIIはクルとスルおよびスルの変種、< >は通称を表す。

【表6】高橋 (2003) によるテ形の種類

(高橋 2003 : 41)

機能	ていねいさ 3 みとめ かた	ふつう体の形式 (ふつう体の動詞)		ていねい体の形式 (ていねい体の動詞)	
		みとめ形式 (みとめ動詞)	うちけし形式 (うちけし動詞)	みとめ形式 (みとめ動詞)	うちけし形式 (うちけし動詞)
中止形	第一なかどめ 第二なかどめ ならべたて形	よみ よんで よんだり	よまず (に) よまないで (よまなくて) よまなかったり	よみまして (よみましたり)	よみませんで(して) (よみませんで したり)

佐久間 (1966), 寺村 (1984), 高橋 (2003) では, テ形は保留あるいは中止形と命名されている。芳賀 (1962), 渡辺 (1971) ではテ形は二種類の活用形に分けられている。(4)と【表3】-【表6】から, 何らかの意味機能があると認められる形式が活用形として認定されていることがわかる。渡辺 (1971) にしたがえば活用形とは陳述または再展叙を託される形式ということになり, 寺村 (1984), 鈴木 (1989), 高橋 (2003) にしたがえば活用とはムードを表す表現形式ということになる。形態と意味との対応から活用形を立てるといふ点では共通しているが, 佐久間 (1966), 寺村 (1984), 高橋 (2003) ではテ形は一つの活用形, 芳賀 (1962) では意味にしたがって連用修飾形と連用並列形に, 渡辺 (1971) では誘導形と並列形に分けられる点異なっている。テ形の形態と意味との対応をどのように捉えて活用体系を立てるのかという問題は後で述べることにする。

次に語形変化のどこまでを活用形として認めるのかという問題を見ていく。その例としてまず寺村 (1984) と, 鈴木 (1989)・高橋 (2003) の活用論を比べてみる。両者には次の二点の違いがある。①ムード以外にテンスを活用の認定基準とするか, ②ある意味を表

3 高橋は中止形ではムード, テンスの категорияが失われており, 特に「まゆみはお手玉をしてあそんでいる」の例ではムード, テンスの機能があるとはいえないと指摘している (高橋 2003 : 43)。したがってこの欄にはムード, テンスという用語は記されていない。

す機能は活用語尾にあると考えるか、それとも単語という単位で存在すると考えるか、の二点である。寺村は活用をテンスの対立ではなく、基本語尾対夕形語尾という形態の対立として捉える。そして、活用とは「概念的なコトが、現実の文として発せられるときに、話し手の態度を表すべくどうしても述語がそこから一つをえらばなければならない形態素の体系（寺村 1984：12）」であり、活用語尾とは「話し手が具体的、現実的な発話としてもち出す、そのもち出し方（ムード）を表す機能形態素（寺村 1984：23）」であるという立場をとる。一方、鈴木（1989）、高橋（2003）は活用を単語という単位で捉える立場をとり、ムードとテンスが活用形認定に関与すると主張する。したがって、「読む」と「読んだ」の対立以外に、「読む」と「読みます」との対立、「読む」と「読まない」との対立など、ムード、テンスの枠組みの中で単語の形式が変化することを捉えるため、その活用表は【表6】に示すように、【表5】の寺村のものより複雑になる。このように、語形変化のどこまでを活用形として認めるのかという点については、活用形の意味を担う部分が活用語尾にあるとみなすか、単語全体にあると捉えるかによって違いが出てくるといえる。しかし、「書かない、書かれる、書かせられる、書かなくてはならない」と語形変化の形式が長くなった場合、どこまでを活用形として認めるのかという点においては、大きなずれはない。ナロク（1998）は、活用語尾には、①語彙的語幹を一つだけ含み、②文においてただ一つの統語論的単位を構成する（他の語を途中に入れたり、途中にポーズを入れて読んだりできない）という二つの特徴があることを指摘する。さらに、ナロク（1998）は構造主義的な Item-and-Arrangement モデルを用いることによって、単語内部の形態素の構成を明らかにし、活用語尾、派生接尾辞を4つの類に分けていく。ナロク（1998）にしたがえば、活用形とは語幹に活用語尾がついたもの、あるいは語幹+C類形態素⁴+活用語尾の形態である。このような方法でテ形を見ると、テ自体は典型的な活用語尾に分類され、「語幹+活用語尾テ」というテを伴う形態で一つの活用形を成すと認められる。寺村（1984）、鈴木（1989）、ナロク（1998）、高橋（2003）など主張は異なるが、テ形が活用形の一つとして認定されることに相違はない。

以上、形態と意味との対応を捉える活用論では、テ形が活用形の一つとして認定されていることがわかる。学校文法の活用論と比較すると活用形の認定方法が明確だといえる。しかし、前述の芳賀（1962）・渡辺（1971）、佐久間（1966）・寺村（1984）・高橋（2003）におけるテ形の分類の違いを考慮すると、形態と意味との対応から捉える活用論にも問題があるといえる。それは、活用＝話し手の態度（ムード）を具現化した形の体系と定義した場合、ムードを持つテ形とムードを持たないテ形をどのように扱うのかという問題である。（5）を例に考えてみたい。

⁴ 語幹に後接し、さらに活用語尾を後接する派生接尾辞のこと。動詞では{mas-, masi-} {are-, rare-} {ase-, sase-}、形容詞では{na-, ana-}が該当する。これらC類形態素を含む語形変化を活用形として認めると、その形態的な分類は鈴木（1989）、高橋（2003）と共通するといえる。

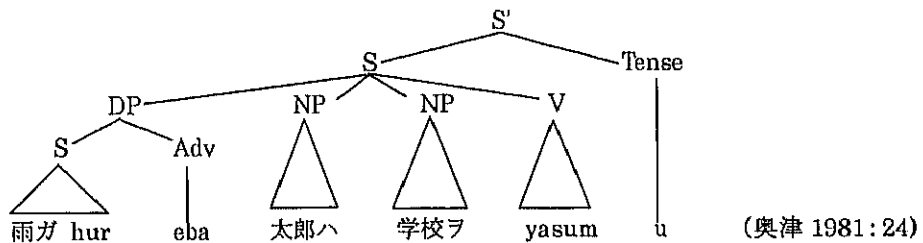
- (5) a. 町へ行って, 買い物をする (保留・中止のムードを表す形態)
 b. 歩いている 読んであげる 降ってくる (ムードを表さない形態)
 c. かばんを持って学校へ行く (?)

(5a-c) の下線部は同一の形態 (テ形) であり, どのテも活用語尾として機能している。しかし, (5a-c) の文法機能は異なっている。(5a) の「町へ行って」は「買い物をする」という文がムードを表すまで態度を保留 (中止) するというムードを表すが, (5b) の「歩いて」に保留 (中止) のムードはない。(5c) の「かばんを持って」は「学校へ行く」に対して保留 (中止) のムードがあるのか不明である。寺村 (1984) は (5a-c) のテ形について, 活用形としては同一のものとして一括りにするが, ムードの有無という点で陳述度の強弱を別に記述すると主張する。(5b) (5c) は高橋 (2003) でも中止法 (第二なかどめ) とは異なる形式として記述することになる。ここで問題になるのは, ナロク (1998) のように形態に注目した場合, (5a-c) のテ形はすべて活用形として認定されるが, 形態と意味との対応を考慮して活用=ムードを表す表現形式と定義すると, (5a-c) のテ形には活用形と認められるものと認められないものが現れ, 活用の定義と分類に齟齬をきたす点である。活用=ムードを表す形式という前提を考え直し, テ形を含んだ文全体の構成から形態と意味との対応を考える必要があるのではないか。この点については 3.2 節で述べる。

3.2 奥津 (1981)

活用=ムードを表す表現形式と定義した場合, 活用形の認定に問題が生じることを 3.1 節で示した。形態と意味との対応を考えていく上で, 形態を「〇〇形」と分類することによつたような意義があるのだろうか。奥津 (1981) は, 形態論的に形式を分類するだけの活用論は不要であり, 文法論において必要なのは文を形成する上である形態がどのように機能しているかを (6) のように見ていくことだと主張する。

- (6) 雨ガ降レバ, 太郎ハ学校ヲ休ム



奥津 (1981) は (6) の「降れば」という形態を例に挙げ, 次のように主張する。例えば「降れば」は 3.1 節で仮定形と分類されるが, 3.1 節の立場での「降れば」は先行する文とは関連づけられない。「降れば」という形態を先行する文と関連づけるとは, 「降れば」は

「降る」ことの仮定ではなく、「雨が降る」ことの仮定だと捉えることである。別の言い方をすれば、文である[雨がhur-]に[-eba]がついて、全体として仮定を表すと捉えることである。奥津（1981）は、形態と意味との対応を捉えるには（6）のようにある形態がどのような文の構造と結びついているかを見ることが必要だと主張する。仮定という意味は（6）のような文構造との関連づけによって生じるのである。さらに、-eba は非自立的であるが、「雨が降れば」が仮定形として機能するのは-eba という形態によると主張する。つまり、奥津（1981）は、意味を表す機能は活用語尾に存在するという寺村（1984）の立場をさらに強く押し進める立場をとり、（6）のような統語環境においてその活用語尾がどのような機能を持つのか分析することを研究の主眼にするのである。このような立場では、2 節と 3.1 節で述べた活用論は不要になる。形態と意味との対応を考えるには、ある形態がどのような統語構造を持つのかを考察し、その統語構造からある形態自体が持つ機能を明らかにすることが必要だといえる。形態と意味との対応は、統語構造と形態との相関を提示することによって捉えられるのである。

奥津（1981）は、学校文法における活用論の問題点を指摘し、形態と意味との対応を捉えるには 2 節や 3.1 節のような形態の分類は不要であると主張した。そして、（6）の仮定形の分析を例に、ある形態がどのような統語構造をとるのかを明らかにすることで、形態と意味との対応が捉えられることを示した。奥津（1981）の主張は、前節までに挙げた活用論の問題を解決する上で示唆に富む。奥津（1981）をもとにテ形を考えると、テ形がどのような統語構造を持つのかを明らかにし、テ自体がどのような機能を持つか分析する必要があるといえる。

4. 南（1974）、加藤（1995a, 1995b）、吉永（1995）

3.1 節の（5）でテ形のいくつかの意味・用法を提示し、活用＝ムードを表す表現形式と定義して形態を「〇〇形」と分類するだけでは形態と意味との対応が捉えられないことを示した。そして、3.2 節で奥津（1981）を取り上げ、形態と意味との対応を捉えるには、ある形態が文中でどのような位置を占めるかその統語構造を明らかにし、統語構造と形態との相関を見ていくことが必要であると主張した。本節では南（1974）、加藤（1995a, 1995b）、吉永（1995）を取り上げ、これらの研究の特徴と課題を示すことによって、統語構造と形態との相関を明らかにすることがどのような意義を持つかを述べる。

3.1 節で寺村（1984）がテ形という形態分類以外に、ムードの有無という点で陳述度の強弱を別に記述する立場をとることを述べた。陳述度が強いとは、一文としての独立性が強いということである。南（1974）は複文において、後節に対する前節の独立性を従属度の高低、およびコトガラの側面、陳述的側面という用語で提示した。複文において前節の独立性が強ければ、前節は文らしいと認められ、前節はそれ自体陳述的側面が強くと、後節に対する従属度は低くなる。後節に対する前節の独立性が弱ければ、前節は文らしいとは言えず、後節に対する前節の従属度は高く、コトガラの側面が強くと（陳述度が弱く）なる。

南 (1974) は複文の前節内に生起する形式的要素に着目して、前節を A 類から D 類の 4 つに分類した。A 類は陳述度が弱く、D 類は陳述度が強い。複文に現れるテ形は先行研究において主に付帯状況、継起、原因・理由、並列の 4 つの意味・用法に分類される⁵。南 (1974) でテ形は付帯状況、継起・並列、原因・理由の 3 つに分けられる。付帯状況は A 類、継起・並列、原因・理由は B 類に分類される⁶。A 類、B 類という分類は、【表 7】 - 【表 9】 に示すテ形節を構成する要素の特性から導き出される。

【表 7】テ形節述部の形態の生起 (cf. 南 1974 : 128-129 第 14 表)

	付帯状況	継起、並列	原因・理由
用言、使役形、受身形、受給形、尊敬形	○	○	○
否定形	× ⁷	○	○
過去形	×	(×)	(×)
丁寧形	×	○	○
用言+形式名詞	×	×	×
意志形、推量形	×	×	×

(×) : そう認めることに問題があることを示す

【表 8】テ形節の主語と後節の主語との関係 (cf. 南 (1974), 加藤 (1995a), 吉永 (1995))

	付帯状況	継起、並列	原因・理由
同一主語	○	○	○
異主語	×	○	○

⁵ 付帯状況、継起、原因・理由、並列を表すテ形を、以下テ形節と呼ぶことにする。

⁶ 南 (1974) ではテ形節をテ₁=動作の様子・仕方などを表すテ、テ₂=継起的または並列的な動作・状態のテ、テ₃=原因・理由を表すテ、テ₄=ラベルなしの 4 つに分ける。加藤 (1995a)、吉永 (1995) では継起用法と並列用法は別にされている。テ₁は A 類、テ₂とテ₃は B 類、テ₄は C 類に属する。A 類とは最も従属度が高く、コトガラ的側面を持つ要素である。B 類とは、その文で表現されるべきことがらに対する言語主体の認定であり、C 類は言語主体の態度を表すものである。C 類のテ₄の例として「タブン A 社ハ今秋新機種ヲ発表スル予定デアリマシテ、B 社モナンラカノ対策ヲトルモノト思ワレマス (南 1974 : 124)」が挙げられるが、これは「マス」という文体が言語主体の態度を表すためである。テ₄に対する立場は内丸 (印刷中) を参照。

⁷ 付帯状況を表すテ形節に否定形が生起することは、先行研究で指摘されている。南自身、A 類の項目の中に B 類の否定形 (～ズニ、～ナイデ) が埋め込まれることを指摘している (南 1974 : 158)。

手をつながないで歩いた

【A [b 汗もぬぐわずに] 走りながら】 (南 1974 : 130)

【A [b 話もしないで] 働きながら】 (南 1974 : 130)

【表 9】テ形節内の述部以外の要素の生起 (cf. 南 1974 : 128-129 第 14 表)

		付帯状況	継起, 並列	原因・理由
名詞+格助詞		○	○	○
主語 (〜ガ)		×	○	○
提示 (〜ハ)		×	×	×
副詞	状態副詞	○	○	○
	程度副詞	○	○	○
	時の修飾語	×	○	○
	場所の修飾語	×	○	○
	ジツニ トニカク ヤハリ etc.	×	○	○
	評価的意味 の修飾語	×	○	○
	オソラク タブン マサカ etc.	×	×	×
従属節の埋込	A 類	○	○	○
	B 類	×	○	○
	C 類	×	×	×

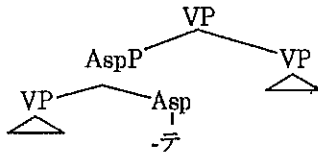
【表 7】 - 【表 9】は、複文に現れるテ形節が、表す意味によって共起する要素に制約を持つことを示している。【表 7】 - 【表 9】のように文がどのような構成要素から成り立っているかを明らかにすることで、形態と意味の間に相関があることがわかる。南 (1974), 加藤 (1995a, 1995b), 吉永 (1995) はテ形節が意味によってどのような構成要素をとるのか明らかにした。しかし、その構成要素と分類は提示しても、【表 7】 - 【表 9】においてなぜ付帯状況以外のテ形節は同じ振る舞いを見せるのかという点について客観的な説明は与えられない。【表 7】 - 【表 9】に挙げた形態的制約に対して説明を与えるには、文の構成要素を記述するだけでなく、3.2 節で奥津 (1981) が示した (6) のようなさらに詳しいテ形節の統語構造を考察する必要がある。

5. テ形節の形態と統語構造との相関

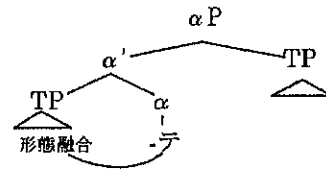
3 節では、テ形という形態と意味との対応を捉えるには、活用=ムードを表す形式という前提を考え直す必要があることを示した。4 節では、複文においてテ形節を構成する文の要素を見ていくとテ形節が表す意味によって形態に制約があり、形態と意味とが対応していることがわかった。しかし、文構成のあり方を記述するだけではなぜこのような形態的制約が現れるのかは説明できず、その統語構造を具体的に示す必要があると主張した。

内丸（印刷中）は、「しーない」テスト、「さえ」焦点化テスト、擬似分裂文テストの3つの統語的テストにより、付帯状況を表すテ形節は(7a)のようにVPで付加構造をとり、継起、並列、原因・理由を表すテ形節は(7b)のようにTPで等位構造をとることを示している。そして、TPで等位構造として派生されたテ形節は、現実世界との対応によって継起、並列、原因・理由などの意味・用法になると主張している。

(7) a. VPで付加構造をとるテ形節



b. TPで等位構造をとるテ形節



(7)のような統語構造が明らかになることで、【表7】－【表9】でなぜ付帯状況以外のテ形節が同じ振る舞いを見せるのか客観的な説明が与えられる。例えば【表8】に示したように、継起、原因・理由、並列を表すテ形節は、後節にテ形節と異なる主語が生起可能である。これらのテ形節がTPで等位構造を形成していることが明らかになれば、これらのテ形節と後節とがそれぞれTPで独立した節を形成するため、テ形節とは異なる主語が後節に生起できると説明できる。テ形節と後節の主語が同一の場合、同一句削除が適用される。また、【表9】に示すように、継起、原因・理由、並列を表すテ形節内に時の副詞の生起が可能なのは、これらのテ形節がTPで等位接続構造をとるからだと言明できる。後節の否定の作用域の問題、「妙にいらいらして眠れない (cf.仁田 1995: 111 (4))」「男だけに社交があって女にはそれが許されていなかった (cf.奥田 1989: 43)」など、テ形節に後接する節に否定辞が生起する場合、その否定の作用域が後接する節だけに限られるのは、テ形節も後節もTPで等位接続し、後節の否定の作用域は後節のTPに限られるからである。継起、原因・理由、並列を表すテ形節は、統語的に等位構造をとる同一のものであり、南(1974)の主張するB類のテ形節はTPでの等位構造に相当する。

さらに、意味を表す機能は活用語尾に存在すると主張した寺村(1984)や、統語構造を示し、先行する文に-ebaという形態が付くことで全体として仮定を表すと主張した奥津(1981)を考慮すると、テ形節が(7a)(7b)という統語構造をとることは、(7a)(7b)を形成するテ自体に何らかの機能があると考えられる。付帯状況を表すテ形節は(8)(9)のように進行相あるいは結果相のアスペクトを表し、「要る」「優れる」などの状態動詞が生起できないという特性がある(吉永(1997))。寺村(1984)、奥津(1981)を踏襲するならば、付加構造を形成するテは、それ自体がアスペクトマーカースとして機能しているといえる。等位構造を形成するテ形節は、(10)のように状態動詞も生起する。等位構造を形成することを考えると、等位構造を形成するテは接続形式として機能しているといえる。

- (8) a. 花子は手を叩いて笑った
 b. 花子は笑った時、手を叩いていた (進行相)
- (9) a. 花子は着物を着て料理を作った
 b. 花子は料理を作った時、着物を着ていた (結果相)
- (10) a. 花子は芸術の分野でとても優れていて、多くの学生を抱えている
 b. 花子はフランス語ができて、太郎はドイツ語ができる

テ形の統語構造を提示し、その統語構造におけるテ自体の機能を明らかにすると、動詞の場合、(7a)では動詞の語幹とアスペクトマーカのテが融合し、V-テになるといえる。

(7b)では時制辞を持つ独立したTP節が、接続形式のテという拘束形態素と形態融合し、V-テになるといえる。表面的には(7a)も(7b)も同じV-テという形態をとるためテ形と呼ぶが、本来は異なる統語構造から派生する異なる形態である。(7a)(7b)のように統語構造と形態との相関を明らかにするという立場では、(4)や【表1】－【表6】のような活用表は意義を持たなくなる。そして、統語構造と形態との相関を明らかにすることで、形態と意味との対応も捉えられるようになる。

(7)では動詞の統語構造とテ形の形態との相関を示したが、いわゆる形容詞・形容動詞のテ形にも(7)と同様の統語構造と形態との相関が存在すると推測する。(11)－(14)に示す環境において、(11b)、(14a-d)が不適格になる理由についても、(7)のような統語構造と形態との相関が明らかになることで説明が与えられるはずである。

- (11) a. 赤く、おいしいトマト
 b. *穏やかに、優しい人
- (12) a. 赤くて、おいしいトマト
 b. 穏やかで、優しい人
- (13) a. 花子はごぼうを薄く、細く切った
 b. 花子は歌を楽しく、上手に歌った
 c. 花子は口を真っ赤に、濃く塗った
 d. 花子は歌を上手に、楽しく歌った
- (14) a. *花子はごぼうを薄くて、細く切った
 b. *花子は歌を楽しくて、上手に歌った
 c. *花子は口を真っ赤で、濃く塗った
 d. *花子は歌を上手で、楽しく歌った

6. おわりに

本稿では、学校文法における活用論と、形態と意味との対応を重視する活用論を概観することにより、形態と意味との対応を捉えるには、文がどのような構成要素を要求し、ど

のような統語構造を形成しているかを提示することが必要であると主張した。このような立場は、活用語尾が直接文の構成に関わるという寺村（1984）の主張をさらに押し進めるものである。テ形に関しては、テという形態それ自体が何らかの機能を持ち、語形変化は（7）のようなある統語構造を反映したものだといえる。奥津（1981）は文法が中心が文だと考えるならば、形態論的活用論を解消し、統語構造の中で形態に対し適切な説明を与えることが必要だと説く。そして、「降れば」を例に、語形変化をどのように捉えるかその方向性を示している。本稿は寺村（1984）、奥津（1981）の主張をさらに発展させ、統語的観点から統語構造と形態と意味との相関を具体的に提示したものである。

本稿の後半では動詞のテ形の統語構造と、テの機能を紹介するだけになったが、今後いわゆる形容詞、形容動詞の「-くて」「-で」という形態についても統語構造との相関を明らかにしたい。さらに、いわゆる形容詞・形容動詞の「-くて」「-で」の統語構造が、動詞のテ形と平行関係にあるのかどうか、もし平行関係にあるのなら統語構造と形態との相関がより一般的なものとして捉えられるのかなど、分析していく必要がある。

【参考文献】

- 芳賀綏（1962）『日本語文法教室』東京堂出版。
- 橋本進吉（1948）『國語法研究』岩波書店。
- 加藤陽子（1995a）「テ形節分類の一試案：従属度を基準として」『日本語教育論集 世界の日本語教育』5：209-224. 国際交流基金。
- （1995b）「複文の従属度に関する考察 主節のモダリティを中心に」 *Working Papers on Language Acquisition and Education* 6:21-37. 国際大学。
- 益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版。
- 南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店。
- ナロク、ハイコ（1998）「日本語動詞の活用体系」『日本語科学』4：7-30。
- 仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」仁田義雄（編）『複文の研究』上：87-126. くろしお出版。
- 奥田靖雄（1989）「なかどめ-動詞の第二なかどめのばあい-」言語学研究会（編）『ことばの科学』2：11-47. むぎ書房。
- 奥津敬一郎（1981）「せしめたしるこ-学校文法活用論批判-」『言語』2：18-26。
- 佐久間鼎（1966）『現代日本語の表現と語法<増補版>』恒星社厚生閣。
- 佐藤直人（1996）「『テ』で導かれる句の構造的な大きさと時称的解釈」『新潟大学国語国文学会誌』38：17-38. 新潟大学。
- 須賀一好（1989）「活用」『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体（上）』143-168. 明治書院。
- 鈴木重幸（1989）「動詞の活用形・活用表をめぐって」言語学研究会（編）『ことばの科学』2：109-134. むぎ書房。

- 高橋太郎 (2003) 『動詞九章』 ひつじ書房.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版.
- 内丸裕佳子 (印刷中) 「動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に—」 『日本語の研究』 2-1 (『国語学』 通巻 224 号).
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』 塙書房.
- 吉永尚 (1995) 「なかどめ形節分類についての考察」 『日本語・日本文化研究』 5 : 93-106. 大阪外国語大学.
- 吉永尚 (1997) 「付帯状況を表すテ形動詞と意味分類」 『日本語教育』 95 : 73-84.
- Kaiser, Stefan (1995) Introduction: Pre-twentieth-century Western studies of the Japanese language: discoveries and rediscoveries. *The Rediscovery of the Japanese Language* Vol. 1:1-89. Richmond, Surrey: Curzon Press.

【参考資料】

- 橋本進吉 (1938) 『改制新文典別記 口語篇』 富山房.
- 三角洋一他 (2002) 『新しい国語 3』 東京書籍.